青少年くらしき
家庭版
発行
倉敷市教育委員会
編集
生涯学習課
☎ 426-3845

「タンチョウ」の里

タンチョウの飼育の第一人者、岡山県自然保護センター主任研究員　井口萬喜男先生の「『タンチョウ』の里」と題したご講演を拝聴いたしました。

先生が全力を注がれているタンチョウへの愛情と、それに応えてタンチョウが醸し出す夫婦愛や子育てに大きな感動と感銘を受けた一時間三十分でした。

要旨を二回に分けてお届けいたします。

酒津貯水池

明治４０年から大正１４年に至る高梁川大改修工事で，東高梁川が廃川になり，跡地に，現在の高梁川東西用水ができた。さらに，水源地一帯に造られた酒津公園は，市民憩いの場として親しまれ，特に春は花見客でにぎわっている。

ご愛読いただきました「くら＆しき」は、３月号で終了させていただきました。３年７か月という長い間，作品を提供してくださった，倉敷市立帯江小学校教諭吉岡直樹先生に厚くお礼申し上げます。

４月号からは、元天城小学校長　藤井啓三郎先生のスケッチによる「倉敷市内名所案内」を掲載します。ご期待ください。

こんにちは。今思えば、私がタンチョウの世話を始めてからもう三十年になります。今では、総社市の下倉橋付近の中州でも育てていて、総社市の鳥にもなりました。今年も二羽誕生しました。

タンチョウは、国の特別天然記念物なので、文化庁や環境省の厳しいきまりがあって、放し飼いをすることはできません。でも、調査ということで許可をもらっています。将来、岡山県を大きなケージと考えて、三大河川をタンチョウが自由に飛んでいる姿を県民に見ていただくことができるようになったらいいなあと思っています。

クロメとチャメ

昭和三十一年、日中友好の架け橋として、一つがいのタンチョウが後楽園へ送られてきました。クロメとチャメと名づけて飼育していましたが、どちらも雌でした。タンチョウの夫婦は非常に仲がよくて、見合いをしてお互いが好きにならないと結婚しません。そして、結婚して初めて交尾してひなが誕生します。そこで、文化庁・環境省・北海道・釧路市へお願いして、見合いの許可をもらいました。でも、チャメは、皮膚病が悪化したため、できなくなりました。クロメは、三回見合いをしたのですがだめでした。あきらめかけた時、釧路市の丹頂鶴自然公園に人工ふ化で生まれたロックという雄のタンチョウがいました。人間に育てられたタンチョウの結婚は無理だと言われていましたが、次第にお互いが好きになって、昭和五十三年の春にめでたく結婚しました。それで、十一月九日にクロメとロックを後楽園へ連れてくることになりました。

その年、私は後楽園で造園の仕事をしていました。ある日、上司からタンチョウの世話をしてほしいという話がありました。私は造園をしたかったのですが、結局、クロメとロックの世話をすることになりました。それで、八月に北海道へ研修に行きました。ケージの中でえさを与える様子を見ていると、離れた所にいたタンチョウが飼育係めがけて駆け寄ってきたと思ったら、くちばしでかみつくは足でけるはで、まるで格闘でした。人工ふ化のタンチョウは、人間を怖がらないから飛びかかってくるのです。私は、防護服を着てえさを与えることにしました。案

の定、何度も何度も攻撃されて、湿原の中に転倒させられました。ところが、四日目からは攻撃してきませんでした。岡山へ帰るころには、普通の服で入ってえさを与えられるようになっていました。

ロックのプレゼント

岡山へ帰ってからはママカリやドジョウも与えることにしました。ところが、クロメは幼鳥のころ、ケージの金網にくちばしを絡めて先の方が変形していたので、ドジョウを上手にくわえることができません。すると、ロックがドジョウをくわえてきて、殺してからクロメの前に落としました。クロメはそれをおいしそうに食べました。それを五日ぐらい続けると、ロックは、次第に生きのいいドジョウを与えるようになりました。クロメは、うまくくわえることができないので、土まみれになったドジョウを苦労して食べていました。ところが、そうこうしているうちに、その食べ方が少しずつ上手になりました。そして、池の中のドジョウをつかまえることもできるようになって、食べることで困るようなことがなくなりました。これは、ロックがクロメに与えた素晴らしいプレゼントでした。私は、タンチョウの夫婦ってすごいなあと思いました。そして、そんなロックとクロメが好きになっていきました。

ラック誕生

昭和五十四年五月、待望の産卵がありました。そこで、卵を丹頂鶴自然公園へ持っていって、高橋良治さんに人工ふ化の技術を教えてもらうことになりました。人工ふ化というのは、本当に単純な作業です。一日六回ふ卵器から出して、転卵(卵をひっくり返して上下逆にする)、放冷(三分間冷やす)をして、ふ卵器へ戻すだけでした。ところが、四時間おきの作業ですから睡眠時間がとれなくて、転卵や放冷をしたのか、温度調整をしたのか分からなくなってきました。二十日を過ぎたころ、卵がぐらぐらっと揺れました。ひながちゃんと育っていたのです。その瞬間、つらいとか眠いとかが吹っ飛んでしまいました。その日からふ卵室へふとんを持ち込んで、二十四時間観察態勢にしました。そして、二十九日目の夕方にいつものように転卵をしたら、「ピロピロピロ」と鳴きました。三十一日目に、小さな穴が開いてくちばしが出てきて、少しずつ穴を大きくしていきました。本当に感動的で楽しかった、ひなの誕生でした。それから、私は、ひなを飼育する準備をするために岡山へ帰りました。そして、二か月半ぐらいたったころ、順調に育っているという連絡があったので、後楽園へひなを連れて帰りました。帰ってから、ひなはラックと名づけられました。

ラックの病気

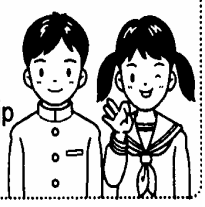
ラックと私は、朝と晩に後楽園の中を二時間ずつ散歩するのが日課でした。ラックは、「ピーピーピー」と鳴きながら私の後をついてきました。半月もしないうちに、「コッコッコッコッ」という鳴き方をしました。これは、「空を飛びたい。」という合図でしたが、当時の私には分かりませんでした。私も、「コッ」と声をかけました。ところが、これは「飛ぼう。」という合図だったのです。それで、ラックは、岡山城を目掛けて一気に飛んでいきました。あわてて、「ラックラック」と叫んでいると、向きを変えて目の前に降りてきました。このことから、飛んだり降りたりする時の合図が分かったので、「思いっきり走って飛び上がり、岡山城近くまで飛んでまた帰ってくる。」ということを何度も何度もやっていました。

それから、三日四日とやっているうちに、えさを食べる量がだんだんと減っていったのです。これは何かあると思って所長に、「獣医さんに診てもらいたい。そして、できることなら丹頂鶴自然公園の高橋さんにも来てもらってほしい。」とお願いしました。すぐに、大阪天王寺動物園から獣医さんが来てくれましたが原因が分かりません。翌日には、高橋さんも来てくれましたが、「こんな症状のタンチョウを診たことがない。このまま進んだら、後一週間もたないだろう。でも、タンチョウは強い鳥だから絶対にあきらめないでほしい。」と言い残して帰られました。

（つづく）

青少年に関する相談

電　話　(086)426－3741
メール　young-kokoro@kurashiki-oky.ed.jp



生涯学習課　倉敷市青少年育成センター